本郷町（ほんごうちょう）

本郷とは、奈良時代の律令制以来、元となる郷と考えられ、開発の拠点であった。この土地の素封家の「高橋家」に伝えられる由緒によると、先祖は、慶長一八年（1613 年）ある事件に巻き込まれ、改易された。九州日向国の延岡城主高橋元種で、元種は奥州棚倉に送られたことになっていたが、実は本郷に隠棲し、孫輔種長と改名したと伝えられている。この高橋氏の本郷城をこの地の名とした。

都盛町（つもりちょう）

旧西恩地　徳川家康が浜松に来る直前に江間太郎左衛門一族がこの地の開発をしていた。
江間氏は神社境内末社にまつられている。頭陀寺領だった西恩地の旧家はどういうわけか、全員禊教である。
芳川村が浜松市に合併するまでは、浜名郡芳川村大字都盛字西恩地といわれていた。

大柳町（おおやぎちょう）

平安時代に書かれた和名抄に大楊郷としるされているが、それは現在の参野町・恩地町・本郷町一帯のことで、その後川の流れの変化によって現在の大柳町が開発された。開発は室町時代、尾張の国から移住してきた安間与三郎により行われたといわれる。

鼠野町（ねずみのちょう）

天正元年（1573 年）四本松村に居住していた古山八郎右衛門が芝切り（くさわけ）である。その仲間たちは大きな枝を広げていた大木の根元に住んだので、根住（ねすみ）の名が生まれ、鼠に変わった。荒野に白い鼠が現れたので、縁起が良いということで鼠野といったともいう。

御給町（ごきゅうちょう）

江戸期における長上郡御給村で、延宝八年（1680 年）の家数は 19 軒であった。言い伝えによると、この村が開かれたのは、天文年間（1532 年～ 1555 年）で、天竜川東岸豊田郡駒場村（磐田郡竜洋町駒場）から移住してきた人たちによって、開発されたという。御給の地名は、浜松藩の殿様が狩りにこの村に来られ、色々と賜り物をしたこととともいわれるが、ここのお寺で黄疸に利く家伝薬を作っており、それに使う五種類の薬草から「ごきゅう」の名が付いたともいわれる。

下江町（しもえちょう）

旧江川　応仁二年（1468 年）轡（くつわ）田伝左衛門が開墾のさきがけである。轡田家は奈良県吉野郡の宇野城の主、江川摂津守義永に仕える家老格の家だった。この城が落城して、熊野灘から船で逃げて、この地に住みついて、旧主の江川摂津守義永をしのんでこの地を江川とよんだ。
また、昔この地が河と海の接点だった頃、内海と河の重なり合った所を江とよんだ。その地形から江川になったという説もある。
旧下前島　慶長末期、積志の前島の鈴木左近太夫一族が開発をすすめたので、自分の生まれた故郷の前島の下にあるので下前島という名をつけた。
浜松市に合併前は芳川村下前島であったが、江川・下中島と共に下江町と新しい名をつけた。
旧下中島　天竜川の川筋の一部、江川と惣別川の間の中州に出来た土地を開拓した所である。

四本松町（しほんまつちょう）

年代はわからないが古山一族が早くから住み、永禄年間に大山一族が住み、戦国期になって紀州から鈴木門五左衛門が移住してきたといわれる。社をまつり、境内の四隅に松を植えて神樹としたので、四本松という。一説には、昔、四本の松があった。山の神という小字に一本、寺の墓地に一本、権現という字に一本、お宮の境内に一本計四本の松が繁っていた。
古老の話によると、権現の一本の松から四本の松がそびえ、根のほうは洗われて、根上りの松で珍しいので、四本松といわれたともいう。江川・四本松は屋根葺（ふき）職人の村で、浜松藩時代、藩に登録されていた者が 45 人（江川 12 人、四本松 27 人、下中島 3 人、御給 1 人、寺脇 2 人）あった。城主の公役に当たるので、地子（租税）を免除されていた。
昭和十年代までは、屋根の葺きかえの時は、江川・四本松へ依頼に行った。この人達を「ふきっつぁま」と呼んだ。